

った次元で個性化し、更に新しい認識方法を確立していくものである。民衆生活と直結する浄土思想の展開は、曼荼羅講説という一方法をもって日本文化史の底に深く浸透していたのである。

明秀の『註記鈔』を自流僧侶用の専門撰述書とし、秘密の書とする見方もあるが、私はこの書は、正統の西谷流の宗学を根底にして、しかも曼荼羅講説開講のための便宜を計るべく述作されたものと考えている。『註記鈔』の奥書に「努力努力秘密にすべし」とあるが、これは中世・近世の法語類や兵法・芸能の諸書に頻出する慣用語であって「秘密にして外へ絶対に見せるな」という意味ではないであろう。「大切にせよ」ということと、謙遜の意も含まれている。明秀の浄土信仰宣明の誉は『愚要鈔』によく現れているが、『註記鈔』にもまた力強い主張が表出されている。

『註記鈔』を完成し、八十余歳となった明秀は、次第に視力が減退して遂に失明したが、失明後に『浄土宗名目見聞』三巻を著述した。これは明秀の口述を侍者が筆録したものである。別名を『盲名目』という。この書は明秀八十余年の長い生涯の総決算ともいえるべきもので、九宗の系統や教判を簡明に叙して浄土教の要旨を述べ、特に浄土の経論書集の要義を説明して一流の哲理を指示している。書名は『浄土宗名目見聞』だが、内容は一代仏教を論じたものである。その他、竹園社在任中に『安養報身報土義』一卷、『四十八願鈔』二巻の著述もある。明秀は長享元年（一四八七）六月十日に竹園社で示寂した。八十五歳¹⁵。明秀の生涯を通じての最高の力作は『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』（仮題・十巻）であったが、鎌倉末

期から南北朝にかけての変動期に、道覚が元弘二年（一三三二）から三カ年を要して鎌倉名越の寛法から『当麻曼荼羅注』を証空の真撰として相伝し、約百五十年後に明秀が『註記鈔』を述作したことは日本浄土教の唱導の歴史上、真に意義深いものがある。

註1 拙著『説教の歴史的研究』所収「曼荼羅講説による浄土教の展開」に詳述。当麻曼荼羅については河原由雄氏が『当麻町史』に発表された御説が大いに参考になる。

2 森英純氏著『白木の聖者』。

3 拙著『説教の歴史的研究』に詳述。

4 南紀総持寺好空著『吾妻善導寺の教系及其伝播』。

5 拙著『説教と話芸』。

6 拙稿「日本浄土教史の盲点―明秀上人について―」（浄全月報35）。

7 『梶取総持寺沿革誌』。

8 『西山全書』第二巻。

9 拙著『説教の歴史的研究』。

10 拙著『安楽庵策伝』。同『説教と話芸』。同『説教の歴史的研究』。

11 拙著『説教の歴史的研究』。

12 渥美かをる氏「『私聚百因縁集』における当麻曼陀羅縁起―浄土宗西山派と美文調唱導をめぐって―」（説林21）。

13 拙著『安楽庵策伝』。同『説教の歴史的研究』。

14 古典文庫『近世仏教歌謡集』（中）所収。

15 『梶取総持寺沿革誌』。『明秀上人全集』。

是れ表示の法門共也。是則ち出離生死往生極樂成仏得果の曼陀羅なる故に方法を織納めて皆出離得生の指南とする也。応知。

これは、明秀が絵解き（講説）に際して必要と認めた語句のみを示したもので、曼荼羅が絵解きとして既に明秀の時代に技術的に進んでいたことを物語る。

五

私は、明秀の曼荼羅講説の方法は、飽くまでも説教（經典講釈・法門講談）の手段として創造されたものと解したい。西山派には曼荼羅事相法門は講説とは別に「曼荼羅相承」という秘儀の形式も伝えられている。明秀の『註記鈔』執筆の成果はこの秘儀の形式の上でも重視されるが、儀式の上や教学の上での大切なテキストともなった。また、近世以降の浄土教発展の上で、説教所その他での講説のテキストとして重用されたことも併せて考えねばならない。

明秀没（一四八七）後の西山派の曼荼羅の系譜は、融舜（一五二三没・『観経厭欣鈔』の著あり）―頭忠（一五四二没・『曼荼羅頭忠記』著）―秀旭（一五五一没）―宏善（一五五七没・『曼荼羅抄』著）―頭貞（一五六四没・『曼荼羅鈔』著）―甫叔（一五八六没）―融隆（一五九五没・『曼陀羅見聞記』著）―果空（一六二三没・『曼陀羅抄』著）―長感（一六二四没・『曼陀羅大略鈔』著）―龍道（一六三五没・『曼陀羅抄』著）―策伝（一六四二没・安樂庵策伝の名で知られる。『醒睡笑』八巻の著あり）と続き、幾多の曼荼

羅講説の名手が輩出した。この系譜は近世中期の昌道、是空らの曼荼羅講説宗匠へ続いて科節が多数刊行された¹³。中世末期から近世にかけて浄土宗では空前の曼荼羅ブームが起り、曼荼羅講説の全盛時代を作った。その風潮は鎮西派においてもあらわれ、近世には袋中の『当曼白記』、大順の『当麻曼陀羅搜玄疏』、明誉の『当麻曼陀羅撮要』等が著作され、観経曼荼羅による布教は隆盛を極めた。『当麻寺曼陀羅反相和讃』¹⁴（龍鑑）や『当麻曼陀羅変相資講』『当麻曼荼羅捫象』¹⁴（演智）『当麻曼陀羅略賛解』¹⁴（仙旭）『当麻曼陀羅和解』等々浄土宗（西山・鎮西）では近世に曼荼羅が頗る盛んであった。そして、近世に出た当麻曼荼羅に関する書物が、ほとんど明秀の『註記鈔』の系を引くものであり、『註記鈔』を超えたものはないことに気づく。換言すれば、近世から近代にかけて浄土宗で盛行した曼荼羅講説の基盤は明秀によって開かれたということである。

中世末期の曼荼羅講説の宗匠たちは、かつての曼荼羅事相法門の相承者たちの皇族貴族対象の高度な講説から次第に庶民的な「まんだら絵解き」へ移行する過渡期に存在していたとも見ることができ。曼荼羅講説そのものもつ弁法は、説教として独特の型を保持して、明秀の『註記鈔』から漸く大衆へのコミュニケーションとして一対衆の形を整えて近世に及んだという見方を私はとる。宗門では長らく口伝・秘伝の形で曼荼羅は相承されたが、明秀が『註記鈔』で示した独特の曼荼羅講説の造型方法については、旧来の個人的な宗学の尺度だけでは測れないように思われる。優れた唱導家は、宗学的なシチュエーションの構成につながりつつも、それを違

乍ら此悲みに遇ふ況んや末世の濁世を哉。多くの功德を修するに此苦を受く。況んや善を修せず法を聞かざる者に於てを哉。南閩浮提の中に大国の王と成り乍ら此歎きを見る。況んや中国小国の王に於てを哉。況んや愚民百姓の賤身に於てを哉。身を別たる子に有てすら父王に怨敵を至す。況んや異姓他人に於てを哉。但し此の如き苦機を以て他力往生の機とはする也。云々」のごときは、完全に明秀の説教であり、この話法は延々十卷に及ぶ。

浄土宗の説教技術が安居院流の系統であることは、安居院流を起した澄憲・聖覚父子と法然との関係により大いに首肯されるところであり、⁽¹¹⁾浄土宗に安居院系の節談説教が入っていたことは容易に想像される。『私聚百因縁集』巻七に見える「当麻、曼陀羅事」に節談説教調の美文が見られることに注意すると、これが安居院流系の浄土宗の、特に曼荼羅講説という特異な説教（絵解き）の影響によるものであることが推察出来る。⁽¹²⁾既に浄土宗西山派祖の証空は、当麻曼荼羅による布教を大に行い、その講説の方法を『当麻曼荼羅注』十卷に明示し、以後、それを基にして曼荼羅の講説が各地で盛んに行なわれた。従って西山流における曼荼羅講説の方法は有識者の間では、かなり広まっていたものと思われる。

明秀の『註記鈔』から、明秀自身の講説の方法を考えてみると、聖覚によって固められた安居院系の話法によることが察知される。かつて証空によって記された『当麻曼荼羅注』にまことに詳細な註解を施して後世の講説の便をはかった明秀の労力を高く評価しなければならぬ。尤も詳細な註解といっても煩雑で冗長なものにした

ものではない。簡潔にすべき箇所は、却って簡略化してわかり易くしている。そこに弁舌家（唱導家・説教師）としての明秀の価値を見出すことが出来る。一例をあげれば左記のごとくである。

証空『当麻曼荼羅注』（末尾）

曼陀羅一部因果凡聖人畜形体員数事

阿弥陀仏三十五体。表ニ三段五義一。釈迦仏六体。表ニ智慧窮一。化仏七十三体。表ニ智慧慈悲与ニ定散念仏来迎一。菩薩二百五十体。表ニ慈悲智慧与ニ五義一。声聞三十三人。新生菩薩二十四人。髮童子六人。白童子三十五人。僧形十一人。童形三人。女形五十人。男形四十八人。鬼形一人。餓鬼形一人。狐一狗一修羅一。人一人。天二人。象師子各一疋。馬一疋鳥十四也。惣凡聖因果。人畜五百九十九体也。五百者五義。九十九者。教外出念仏来迎一作ニ教内教外也。念仏心一切衆生令レ称者九十也。来迎令レ往ニ生一切衆生ニ者九体也。織籠万法。攝ニ一切ニ皆成ニ衆譬ニ。而同令ニ出離生死往生極樂成仏得果一。故無有レ漏ニ曼陀羅利益者。応レ知。

明秀『註記鈔』（末尾）

次に因果凡聖人畜等の員数の事

阿弥陀仏三十五体。釈迦仏六体。化仏七十三体。菩薩二百五十体。声聞三十三人。新生菩薩二十四人。髮ある童子六人。白童三十五人。僧形十一人。童形三人。女形五十人。男形四十八人。鬼形一人。狐一。狗一。修羅一人。人一人。天二人。象獅子各一疋。馬一疋。鳥十四也。総じて凡聖因果人畜等五百九十九体。皆

たかがわかるのである。「埋壁底云々」は、法然の『選択本願念仏集』の末尾に「埋_ニ于壁底_ニ莫_レ遺_ニ窓前_ニ」とあるのに準じたものである。『当麻曼荼羅注』十巻の内容や精神は、終始善導の『観経疏』に基づく証空の『観無量寿経』に対する識見と信心が述べられているのだが、われわれはそれを知ると同時に、曼荼羅絵相による説教の方法が如何なるものであったかを誤りなく追及考察せねばならない。要するに西山派の宗学という教相に対する事相の在り方に近代学問のスポットを明確に当ててみなければならぬと思う。証空以後、曼荼羅を相承したものは多く、西山流では教学的に、鎮西流では布教的に長く継承されたのである。⁽⁹⁾しかし、証空の『当麻曼荼羅注』十巻に註解を施したものはなかった。それを始めて勇断をもって行なったのが明秀の『当麻曼陀羅註明秀鈔聞書』十巻であった。

四

明秀の『当麻曼陀羅註明秀鈔聞書』（仮題・以下これを更に略して『註記鈔』と記す）は、証空の当麻曼荼羅拜見の理由から筆を起して証空の曼荼羅尊重の精神を継承する姿勢を示し、絵相の解説に文学的・話術的（説教上の）表現をみせている。従ってこの書は、後世の曼荼羅講説の重要なテキストとして製作されたという見方も成り立つのである。単なる純学問的講録ではなく、明秀の優れた曼荼羅講説の聞書であることは間違いないものと思われる。この『註記鈔』には、証空の曼荼羅弘通の精神を十分に会得しながら、

聴聞者のために飽くまでも曼荼羅の真意を領解せしめようと意識した講説者、説教者（唱導家）としての明秀の熱烈な弁法が十二分にあらわれている。々まんだら々は純学問として机上で考察されると同時に、講説（絵解き）としての機能が十分に発揮されねばならぬ。曼荼羅講説は、飽くまでも説教（説経）である。別のことを言えば唱導説経（經典講釈・法門講談の）重要な一ジャンルである。⁽¹⁰⁾『註記鈔』は、『総持寺伝』に「辯才無碍の高徳」とまでいわれた明秀の優れた説教技術を想わせる聞書である。

『註記鈔』における明秀の講述は卓越したものである。「禁父縁絵相の事」では「次に青葉の木末見たるは是れ衆生の体を表する也。木は即ち衆生を掌るなり。課く果を頭とし枝を以て手とし根を以て足とし葉を以て名とし花を以て体とする也」といい、「第三重、絵相の事」では「譬へば湿木には火遷り難し、乾薪には火自ら踊るる如し。日比の化前の慈悲智慧は湿木の如し。初の惣門の青葉の木末是也。今禁獄の父王は枯樹の如し。今、家の内に合掌して坐したるは父王是也。云々」と述べる。これは曼荼羅講説の方法（絵解きの仕方）を教えるテキストであり、いわゆる譬喩説教の妙諦が懇切に示されている。後世に辯才無碍の高徳と賛えられた明秀の優れた説教技術の一端を知ることが出来る。この方法は、大著『註記鈔』に限らず示されている。

「初段の絵相の事」に説く「今韋提希夫人は世出世二種の果報に尽き畢て死路且夕の間に成り給へり。此意を顕す芭蕉也。然れば則ち罪業深重の苦惱の韋提夫人を以て手本とす。所謂仏の在世に在り

一卷とみた。慈悲の巻は迷界の凡夫に対して向上の一路を示す大悲の指導録であり、智慧の巻は向上の一路に立つ往生人の永久活躍を示すテキストともいべきものである。慈悲は信仰を意味し、智慧は実行を意味する。これは一代仏教を自己の一身に体得した姿であり、それはやがて安心起行の義を意味する⁽⁶⁾。

上州吾妻善導寺道場に上り、三十余年の修行により慈悲を得た明秀は、紀州に赴くことにより、智慧の世界に身を置くことになった。自策自励遠く四弘・六度を實踐する覚悟をした。善導・法然・証空直系の浄土教旨を掲げる明秀の宗教家としての根本態度は、『愚要鈔』以後の著述においても一貫していた。南紀一帯の教線を張った明秀は、真宗の本願寺八世蓮如（一四一五〜一四九九）が山科に本願寺を建立する文明十一年頃、即ち文明十年（一四七八）八月から翌十一年三月までかかって『選択集私鈔』三巻を著述して浄土教徒としての意味を主張した。七十七歳の人生観の披瀝が私鈔という一つの形を作ったのである。『選択集私鈔』を著述し終った老僧明秀は、間もなく三十年にわたった総持寺の生活を退いて加茂の小原、長福寺に閑居した。この寺は後に寛文中に寺号を明秀寺と改めて今日に及んでいる。長福寺に在住した明秀は、更に山を背にした曾根田郷に竹園社を創めて移り住んだ。そして、集まり来る雲納のために寄宿舎まで建てて講義を行なった⁽⁷⁾。

『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』十巻は、明秀晩年の竹園社において講演された浄土変観經曼荼羅の聞書である。前述のごとく、この書は、文明十四寅年（一四八二）六月より翌卯年十二月に至る間に

なされた大事業で、実に明秀八十一歳の老年に成った大著である。浄土宗における当麻曼荼羅の相承が、法然門下の善慧房証空から始まったことは既に述べたが、浄土宗における当麻曼荼羅に関する著述の中で特に注目すべきは、証空の『当麻曼荼羅注』、武蔵・増上寺開基會聖聡（永享十二年没、七十五歳）の『当麻曼陀羅疏』（永享八年）に明秀の『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』の三大著述である。

會聖聡は『当麻曼陀羅疏』の中で、浄土宗における曼陀羅講説の発端を証空と認め、証空が曼荼羅を諸国の大勢の人々に拝ませいと全国六十余州一国に一鋪宛との発願のもとに十三鋪まで画かせて都の方々の道場に安置し、更に印板を開いて摺写し、本邦ばかりではなく、遠く大唐にまで広めた：と述べている。素より會聖聡が『当麻曼陀羅疏』を述作したのは証空の当麻曼荼羅拜見より二百余年も後世のことであり、ここには潤色もあり、伝説化されたものではあるが、たとえ誇張して伝えられたとしても曼荼羅絵相というものが見聴覚説教として並々ならぬ貴重な存在であったことが推測出来る。

証空の『当麻曼荼羅注』十巻は全文漢文で記されているが、これによって曼荼羅講説の原初形態を推察することが出来る⁽⁸⁾。西山派の宗学では、古くからこの書は証空の存命中は世に出ず、長く秘書として伝えられたことが伝承されている。同書の序文に「埋壁底、努々勿^レ伝^レ非機^一。其故曠劫無數劫、己来未^レ見^レ今見^レ之法門也」⁽⁹⁾とある。仮に序文が後人の筆に成ったとしても、如何に大切に伝承され

持寺（和歌山市梶取八六）、明光寺（和歌山市直川一七二六）、竹園社（和歌山県海草郡下津町大字曾根田六五一）、明秀寺（和歌山県海草郡下津町小原一三七九）、浄教寺（和歌山県有田郡吉備町大字長田三〇）、深専寺（和歌山県有田郡湯浅町大字湯浅七八五）、法蔵寺（和歌山県有田郡広川町上中野一一八一）、安樂寺（和歌山県日高郡日高町大字萩原小字東光寺一一四六）である。その他、法岸寺、常樂寺、光明寺、西岸寺、東光寺、観音寺等も明秀開基といわれる。また、明秀の著述として今日に伝わるものの中で代表的な作は『愚要鈔』三卷、『選択集私鈔』三卷、『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』（仮題）十卷、『浄土宗名目見聞』三卷、『安養報身報土義』一卷、『四十八願鈔』二卷であるが、弥陀の誓願を示し、領解の眼を開けと教え、領解の水に仏月宿るとさとし、歡喜の念仏を唱え、具三心者必生彼国（觀無量寿經）と帰結する浄土教を示す明秀の著述は、あくまでも説教のポイントを民衆にわかり易く説くところに置かれた。『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』の講述態度は、決して専門的な難解なものではなく、この書はそのまま「まんだら絵解き」の実演に役立つ貴重なテキストとなっている⁽⁵⁾。

明秀の説法の態度が如何なるものであったかは、寛正二年（一四六一）五十九歳の時に述作した『愚要鈔』三卷を見れば明白である。この書において明秀は、かつて自ら説法した趣旨を四十七章に分けて集録している。明秀独自の法門講談の中で、人間の浅はかな争いを超然と眺め、問答形式をもって凡夫の懷疑を解く。「聞法即見仏なるべし」は、明秀が説法の人であることを立証する。浄土教

の根本の立場、浄土教より見た一代仏教、浄土教より会通した孔・孟・老・莊、浄土教の証道、浄土教より体得した祈祷、浄土教から見た諸仏諸神の問題に対して究明しようとした優れた宗教書として注目しなければならぬ。特に同書の奥書に「為信極樂往生之道在俗尼女等初心人欲令易見易知拾仮名字集大和語云々」とあるのは、如何に明秀が民衆を意識し、多数の人々に教化を及ぼそうとしたかが分るのである。自己の立場を固く定めて、組織的に達意を叙述したものは浄土宗史においても類稀なものとして留意しなければならぬ。この『愚要鈔』述作の根本態度は、『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』にもよく現われている。

三

法然房源空は、道綽の教判をとって一代仏教を聖道門・浄土門の二つに分け、善導一師によって聖道を捨てて浄土を立てた。その統を受けた聖光房弁長は、法然の室に投じて弁阿と称し、一旦帰国後再度上洛し、法然に随従して六時礼讃と六万遍の念仏に明け暮れる専修念仏者となった。『宋代念仏授手印』の著述と『徹選択』の良忠への授与は周く人の知るところである。善慧房証空は、簡明な表現解釈のもとに一代仏教を判釈し、慈悲教・智慧教の二つを立てた。明秀を論ずる場合、この証空の判釈を知ることが重要である。即ち証空は、『觀無量寿經』一卷を慈悲の巻として、浄土教に関する『無量寿經』『阿弥陀經』等の総てをこの巻の中に収め、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃などの一代五千の諸經を悉く智慧の

り、以後、円光―光融―光榮―光空―融舜と西山派の世代が続き、第十六世呑空（元和元年寂）の時代に末寺百二十カ寺を率いて鎮西に転派し、増上寺末となったと善導寺の寺伝に伝えている。転派した理由には諸説があるが不明。徳川家康の政策に起因するという説が強いが不詳である。

吾妻教学とまでいわれた善導寺道場からは多数の傑僧が輩出した。殊に善導寺二世円光（応永三十年〔一四二三〕没）の門下からは、光融妙静、光雲明秀、光居智通らの優れた学僧が出た。中でも明秀は、中世の日本仏教界を代表するに足るほどの偉業を残しながら後世の仏教史家の視野の外に出て、今日もなお日本浄土教史の盲点に立たされた感がある。その一因は、近世に入って善導寺が西山派から鎮西に転派してしまったこともあり、西山派が単称浄土宗の巨大な勢力に圧倒されて弱体化したことにもよる。そのため明秀の業績は浄土宗の宗学からは、はみ出してしまい、西山派では偶像化されて、ついに彼の卓越した浄土教学は一般には確認されることなく少なくて歴史を経てしまったのである。

明秀は、日本史上に著名な赤松一族の出身であると紀州・総持寺（和歌山市梶取）の寺伝が伝え、紀州一帯に十八カ寺の浄土宗寺院（現在は西山浄土宗に所属）を続々と建立し、六部に及ぶ大著を述作し、ついに今日の百八十院にも上る紀州浄土教団の基を開いたという伝説を残している。『総持寺伝』には明秀は「播州の人赤松義則の子にして円心則村の曾孫」「幼稚にして上州吾妻郡河村田部善導寺円光上人の室に投じて出家得度し浄教の習修年を累ね漸く一

宗の故実奥義を究む」とあり、『明秀上人全集』（西山全書）の序文には「上人俗姓は源氏、村上天皇の皇子具平親王の後裔也。寺伝に曰く、播州揖保郡広山の人赤松義則の子也と。然れば彼の護良親王の令旨を奉じて勤王の義兵を挙げたる赤松則村円心の曾孫にして、嘉吉の変に自刃せし満祐の舎弟なり」と明記する。従って宗門（浄土宗西山派）ではこの説が長らく伝承されて来ているが、浅羽本以下数種の「赤松系図」には明秀は明確に登場せず、学問的には明秀の郷貫を証明し得ない。それにしても明秀が、中世末期における日本仏教界有数の人師でありながら、その伝記が曖昧模糊として伝えられ、日本仏教史の盲点に立ってきたのは真に懐疑的なことといわねばならない。また、播州赤松族出身と伝えられる明秀が、遙々と上州吾妻の善導寺まで足を運んで修学した経緯も不明である。明秀の法脈上の位置においても『浄土宗三国伝来血脈譜』等に容易に現われず、調査は難渋を極める。西山派の法脈に「識阿―円光―明秀」という系譜が伝えられているが、善導寺開山の識阿（応永十三年没）が「紀州湯浅の産なり」といわれることから紀州と吾妻善導寺の関わりが僅かに想像されるのみである。明秀の善導寺入りは、識阿によって開かれたこの寺が、浄土宗（西谷流）の根本義を伝える由緒ある道場として既に諸国に知られていたからであろう。

何れにしても明秀が、吾妻善導寺二世円光の室に入って修学し、後に紀州にて百八十院にも上る浄土教団の基を開いた非凡な宗教活動と六部の著述を残した業績は厳然として明確に記録されている。明秀の開基と伝える十八カ寺のうち、現在わかっているものは、総

一、△略▽

右の石黒観道氏の跋文により『明秀上人全集』所収の『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』の名称の由来や底本については明らかである。

本書は、法然門下の善慧房証空（一一七七～一二四七）が貞応二年（一二二三）四十七歳の時に述作した『当麻曼茶羅注』十巻に註解を施したものであり、後世の浄土宗における曼茶羅講説開筵のテキストとなった貴重なものである。曼茶羅講説とは、法然没後の浄土宗に伝承され、盛行した視聴覚説教で、大和当麻寺に在る浄土変観経曼茶羅（通称「当麻曼茶羅」）の模本を掲げて講説する説教をいい、俗に「まんだら絵解き」という。（大和当麻寺の「まんだら」は、真言系の用字から「曼茶羅」と記しているが、浄土宗に入ってから「曼陀羅」と記すことが多いが、本稿では書名以外は「茶」を用いて記述することにしたい）

浄土変観経曼茶羅の講説は、法然没後浄土宗に起った（特に西山派祖・善慧房証空）ものであるが、この絵解き説教は、中世末期から近世初期にかけて最も盛んであった。古く大和当麻寺の中將姫伝説による蓮糸曼茶羅に端を発し、『諸寺縁起集』『当麻曼茶羅縁起絵巻』（鎌倉光明寺蔵）『古今著聞集』『曼茶羅縁起』（弘長二年・証慧）『元亨釈書』等に原型が記され、更に中將姫の伝説を織り込んで発展し、謡曲・説経浄瑠璃・歌舞伎・小説等様々な文学や芸能にあらわれたことや、この「まんだら」がわが国における浄土信仰の大きな拠点になったことはよく知られている。⁽¹⁾

浄土宗の教学では、当麻曼茶羅は、天平宝字七年（七六三）六月、中將姫如尼の志願に感応して弥陀の化身である化尼と観音の化身である化女とが、百駄の蓮茎から糸を取って織りあらわしたものであると伝承されて来た。これは『観無量寿経』の所説を画いたもので、善導の『観経疏』の分科に準拠したものである。それを指摘したものは善慧房証空であった。証空は、寛喜元年（一二二九）に当麻寺へ参詣して曼茶羅を拝見する前に、師法然の『選択本願念仏集』の指示に従って善導を尊敬し、善導の『観経疏』により更に『往生礼讃』等の具疏を併せて研究し、既に己証の法門を樹立していた。その述作は『観門義』（自筆鈔四十三巻）として残された。その『観門義』における証空の見解は、後に当麻曼茶羅を拝見することによって「不思議一にあらざ」（仁空実導『西山上人縁起』）と感嘆するほど曼茶羅の構図が善導の『観経疏』の分科と一致していたのであった。証空は当麻曼茶羅を拝見して、己証の法門が善導の真意に一致した確証を得、更に深く曼茶羅の絵相銘文について研究を重ね、その成果を『当麻曼茶羅注』十巻に著述したのであった。⁽²⁾

証空没後、「まんだら」の宗匠として講説を行った人は多いが、⁽³⁾証空の『当麻曼茶羅注』十巻に詳細な注釈を加えて著述をしたものとしては明秀の「当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書」が最初であり、傑出している。

二

上州吾妻・普光山善導寺の開山は浄土宗西山派西谷流の識阿であ

当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書

関山和夫

一

住職少僧都稻垣策瑞謹写

一本云大正十五年十月二十八日写畢

於隠棲地 星水山 聖空慈賢 九拜 生年五十七歳

底本 関本諦承老師所蔵本

校訂者 石黒観道

付記

『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』(仮題)十卷は、浄土宗西山派の僧・明秀光雲(応永十〔一四〇三〕〜長享元〔一四八七〕)が、文明十四年(一四八二)六月一日より翌十五年十二月一日までかかつて講述した当麻曼荼羅(浄土変観経曼荼羅)の聞書である。

本稿のテキストは『西山全書』別巻第二『明秀上人全集』に翻刻所収『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』であり、論題にもその名称を採ったが正式の書名は不明である。『当麻曼陀羅註記明秀鈔聞書』とは、校訂者・石黒観道氏の命名による仮題である。跋文に次のようにある。

真空本奥書云

本云今此曼荼羅去文明十四^{壬午}年六月一日開白^{ウツ}次年^{癸卯}十二月二日於

紀州海士郡仁義莊曾禰田之里竹園精舎 明秀上人私記^レ之畢

本云天文八年仲春十八夜 曼荼羅明秀鈔第十卷終

大正五年六月四日丹波国南桑田郡大井村大字並河光松山法然寺

一、本書は上人八十一歳の老齡、文明十四年六月一日より翌年十二月一日に至り講述せられたるものとす
一、古写本題号には当麻曼陀羅聞書明秀鈔或は曼陀羅聞書鈔 曼荼羅明秀鈔とあって一定せず、今私に当麻曼陀羅註記明秀鈔と定めたり是非か。

一、△略▽

一、真空老師(関本諦承老師―関山注)の所蔵を底本とし、東本山禅林寺文庫の天和三年書写本、妙心寺空翁の寛政四年本、光慈賢師(聖空慈賢師―関山注)所蔵大正十五年本を対照したるが伝写の久しき魯魚の歎、蠹字誤字等あり、且又文字に出入ありて一定し難き個処間々ありしも底本を根拠とし校訂せり。